日本キリスト教会　広島長束教会だより

ミニバラ No.22

〒731-0135　広島市安佐南区長束 3-32-16

TEL/FAX
082-238-3459

2008 年 10 月発行

目から鱗(うろこ)が

「アナニアは出かけて行ってユダの家に入り、サウロの上に手を置いて言った。『兄弟サウル、あなたがここへ来る途中に現れてくださった主イエスは、あなたが元どおり目が見えるようになり、また、聖霊で満たされるようにと、わたしをお遣わしになったのです。』すると、たちまち目からうろこのようなものが落ち、サウロは元どおり見えるようになった。そこで、身を起して洗礼を受け、食事をして元気を取り戻した。」

（使徒言行録 9 章 17~19 節）

「目から鱗」と言う表現は、今日日本でも、ごく普通に用いられます。新たな発見によって、思い込みが正されるような場合、この表現がよく使われます。では一体、どんな発見をして、サウロは思い込みを正されたのでしょうか。

一つは、イエス・キリストを知る知識の絶大な価値に目を開かれたことでした。その結果彼は、今まで彼が誇りとしていたこの世の宝を、塵あくたと感じるようになったのです。恐らく彼は、キリストを信じたことで、親からは勘当を受け、財産贈与の資格を失ったものと思われます。何故なら彼は、フィリピの信徒への手紙３章８節で、「キリストのゆえに、わたしはすべてを失いました」、と言っているからです。しかし、その言葉に続いて、彼は、「それらを塵あくたと見なしています」、と言い切るのです。それは彼が、「主イエス・キリストを知ることのあまりのすばらしさ」を知ったからでした。

もう一つの発見は、自分自身についての正しい認識と言う、自己発見でした。それまでの彼は、自分の毛並み、自分の学歴、自分の能力、自分の努力、自分の業績等々を、大いに誇り、まさか自分が、罪深い惨めな人間だとは露知らず、自信満々で生きていたのですが、しかし、天の光にさらされ、隠れていた罪が暴き出されることによって、自分を救い難い“罪人のかしら”（Ｉテモテ 1：15 口語訳）として、自覚させられるに至るのです。しかし、その自覚は、却って喜ばしいもので、こんな自分が、キリストの十字架と復活の故に、罪赦され、掛け替えのない者として、既に神に受け入れられていることをも、同時に知らされたからでした。

サウロはヘブル名、パウロはラテン名、彼はディアスポラのユダヤ人として、二つの名前を持っていました。サウロとは、イスラエル初代の王サウルと同じ名で、ただギリシャ化したため、サウルがサウロになっただけなのです。サウロの家系は、ベニヤミン族に属していました。イスラエル初代の王サウルもベニヤミン族の出身でした。恐らく、サウロの両親は、自分たちが属する部族の誇り、サウル王にあやかって、我が子をサウル（サウロ）と名付けたのでしょう。サウロ自身も、両親と同じように、最初は誇らかに、専らサウロの名を用いたものと思われます。

ところが、使徒言行録１３章９節までは、サウロと呼ばれていた彼が、この節を境にして、それ以後は最後の章に至るまで、パウロと呼ばれるようになるのです。それが始まったのは、第１回伝道旅行の途中、キプロス島に於いてでした。多分彼自身が、以後ずっと、パウロを名乗ったからなのでしょう。実は、パウロ、正確にはパウロスとは、ラテン語で、“小さい”、“僅か”、“短い”と言った意味の言葉なのです。恐らく以前は、余り用いたくなかったこの名を、神の前に小さくなる者こそが、大きく用いられることを知って、彼は、むしろ喜んで、積極的にこの名を用い出したのでしょう。コリントの信徒への手紙一１５章９節で、「わたしは、神の教会を迫害したのですから、使徒たちの中でも一番小さな者であり、使徒と呼ばれる値打ちのない者です」、と言いながら、そんな自分が、他の誰よりも多く働き得たのは、小さい者をお用いになる神の憐れみの故だ、と彼が言っているのが、その何よりの証拠です。　　牧師　三輪恭嗣

（2008 年 8 月 24 日の礼拝の説教より）